

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

タイトル：「アフリカに関する史的研究と資料」（平成 28 年度第 2 回研究会）

日時：平成 28 年 11 月 19 日（土）午後 1 時より午後 6 時 30 分

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 301

---

西野太郎（中央大学）

「カブラルの航海記録に関するイタリア語写本の新たな価値：キルワ王国関連記事を中心に」

本報告では、西暦 1500 年から 1501 年にかけて行われた、ペドロ・アルヴァレス・カブラル指揮下のポルトガル船団によるインドへの航海を記録した四つのイタリア語写本について、最も信頼性の高い写本の特定とその史的価値の分析を試みた。現存する諸写本は、カブラルのポルトガルへの帰還後に、既に散逸したポルトガル語原本或いはそれに類する写本等からイタリア語に訳されたらしい。カブラルの航海がインド洋海域の諸港市との友好通商関係の構築を目的としたことから、その航海記録の一つの特徴は、諸港市との接触・交渉はじめ 16 世紀初めのインド洋海域に展開した諸港市の政治経済等の諸状況を伝えている点にある。この記録は、文字史料のきわめて少ない東アフリカ沿岸部の歴史的状況に関する分析を進める上で有効な史料であると考えられるものの、従来の研究ではほとんど利用されていない。本報告では、特に現地側の史料であるアラビア語写本の『キルワ年代記』はじめ比較検討が可能な資史料を比較的多く有するキルワ王国に焦点を当てて検討した。

まず、諸写本について、原本に対する忠実さ、記録内容の詳細さ、そして記録内容の正確さという観点から検討した。その結果、諸写本の中で、Contarini. B（以下 Con.B と略記）が原本に近似する最も信頼性の高い写本であると考えられること、Con.B 以外の諸写本は要約本であることを指摘した。

次に、Con.B の史的価値について、以下の三点から検討を試みた。それはつまり、著者、キルワ王国の交易取引の状況、ソファアラの金をめぐる状況である。Con.B には、寄港地においてその支配者を訪れたポルトガル側使節団の行動を詳細に記録していることや、分遣隊の入手した情報が航海記録全体の最後に記されていることから、著者は船団の航海中の行動を記録する書記の立場にあったと考えられる。次に、キルワ王国の交易について、Con.B の富裕層、大商人の居住区域での金など奢侈品の取引が行われていたという記録を基に、ソファアラの金に言及した書簡や考古学的知見と比較検討することで、キルワ王国が組織化された管理交易を行っていたことを指摘した。さらに、ソファアラの金についての Con.B の具体的な記録を通じて、金の交易は主に 3 月から 4 月にかけて活発に行われていたこと、産金地域である内陸のジンバブウェ高原地域から幾つかの交易ルートを通じて、バ

ントゥー語系の商人が金をソファアラにもたらしたことが明らかになった。以上の検討を通じて、カブラルの航海を記録したイタリア語写本の **Con.B** は、キルワ王国の歴史的状況、特にポルトガル人の来航前の具体的な状況を理解する上で有益な史料であるといえることができる。

報告後には、東アフリカ史研究におけるイタリア語史料の可能性やイタリア側の迅速な情報入手、またポルトガル人のインド洋海域に関する情報の蓄積が主に議論された。

---

## 北川勝彦（AA 研共同研究員／関西大学）

### 「アフリカ史研究の『リオリेंट』再訪」

2016年11月19日に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所セミナー室において共同利用・共同研究課題「アフリカに関する史的研究と資料」研究会報告が行われた。研究協力者の西野太郎の報告に続いて、共同研究員北川勝彦（関西大学）の「アフリカ史研究の『リオリेंट』再訪」（“Re-Orient” of Africanist Historiography Revisited）と題する報告があった。

当日の研究会参加者は、共同研究員、研究協力者および一般の参加者を含めて8名であった。

北川の報告は、報告者自身がこれまでのアフリカ史研究において活用してきた史料の紹介から始まって、日本とアフリカの関係の現状および世界史の展開における「現在」の位置づけ、さらには今日の「アフリカニスト・ヒストリアン」の自己認識と役割についての問題提起からはじまった。北川報告の最も重要論点は、前回の永原陽子の「アフリカ史のアフリカ化」を踏まえて、この課題を **Terence Ranger** がかつて提起した課題を準拠枠組みとした場合に、本共同研究における成果報告をどのような整序枠組みにもとづいてまとめていくことが適当なのかという点にあった。さらに北川報告のもう一つの問題提起は、世界史の展開あるいは世界史の研究において「アフリカを中心化」する途をどのように模索するか、すなわち、どのような視点ないし枠組みに基づいてアフリカ史の営為を記述するか、という点であった。北川報告では、**Ali Mazrui** の近著 (*Afeasia: A tale of Two Continent*, 2012) を参考にして、アフリカ史の展開を4つの事象 (**indigenization, domestication, diversification, horizontal interpenetration**) に焦点をあてて記述すべきという問題が提示された。

北川報告では、以上の議論を具体的に論証するために、UNESCO が21世紀に入って出版した人類史研究の成果 (**History of Humanity**) の分析の必要性と報告者自身がこれまで取り組んできた南部アフリカ史研究において準拠してきた **South African Historical Journal** にみられる近年の新たな研究動向の批判的検討の必要性が提起された。この最後の二つの問題提起は、その内容に十分踏み込むことはできなかったが、報告者からは今後

の課題としたい旨の発言があった。

報告終了後、質疑応答が和やかな雰囲気の中で行われた。第一に議論された点は、アフリカ史を最近の「長い 20 世紀」に限定した場合に、19 世紀末のベルリン西アフリカ会議以降のアフリカの断片化（具体例の一つとしてはアフリカ分割による国家と民族の不一致）の概念規定とその実態をどのように理解するかという課題であった。すなわち、アフリカ史の展開を別の面からみれば、そこには連続性と接続性のディメンジョンがあるという指摘とそれをめぐる議論が展開された。第二に、アフリカ史、特に植民地史の理解をめぐって帝国史をいかなる問題構制のもとにとらえるか、という論点開示ないし質問があった。これについては、報告者からアフリカニストとして、あるいは **imperialist historian** として自らの置かれている日本の歴史と現状にどのように向き合うか、という基本的な問題への取組を歴史家としての深層にどのように定置し、それを自らの研究対象にどのように反映させるか、とう知的営為を持続させることによって切り開かれるのではないかとの趣旨の返答があった。

以上のような議論が展開されたが、この議論から提起された諸論点は、成果報告をまとめるに当たって大いに参考となるものであった。

※なお、北川報告の詳細については、「別紙」も参照のこと。